

短 報

在宅認知症高齢者の家族介護者の介護に対する思い

—将来受けるであろう介護に対する思いに着目して—

松本啓子*¹ 清田玲子*²

緒 言

2000年に介護保険制度が始まって以来、依然として認知症高齢者への迅速なケア等対応が叫ばれている。国の施策は、介護が必要となってもできるだけ軽い状態で最後まで自分らしく生きていくことを重視するが故に、介護度の高くなった高齢者や医療依存度の高い要介護者も一律に在宅介護を強いられている¹⁾。

国が在宅介護の視点を重視するのであれば、個々のニーズやサービス需要の高い要介護高齢者や認知症高齢者の介護する側である家族介護者の、QOLを含めた精神的健康等に着目をする必要が生じるのは当然のことである。このようなことを前提にするなら、実際に在宅で介護に携わっている家族介護者自身の思いに焦点を絞り、質的な分析を進める必要がある。

在宅認知症高齢者の家族介護者に関する研究は、欧米で1980年代から、負担感に関する報告として活発になされている。特に Zaritら²⁾の研究成果が世界的に知られているところである。我が国においても、1970年代後半より、障害老人の介護者を対象として、評価尺度化や影響を与える要因との関連研究等、数多くの介護に関する検討が行われてきている。しかし、日本のみならず欧米諸国においても、在宅認知症高齢者の家族介護者の思いに着目した上での、系統的な研究はほとんど見当たらない。また、家族介護者が、実際に在宅で介護を行いながら、自分が将来受けるであろう介護について、どのような思いで日々を送っているのか、そこに起こっている現象に着目し、分析を行った報告が未だ数少ない。家族介護者の思いを明らかにすることで、ケア介入時にその思いに寄り添う支援に的を絞ることも可能となってくる。一方、その合理的な援助を通して、認知症高齢者自身のQOLをも向上されうる。そこ

で本研究は、在宅認知症高齢者の家族介護者が、介護を通して自分の将来的な介護像にどのような思いを持っているのかを明らかにするために質的因子探索的に分析をすることとした。

研究 方法

1. デザイン

本研究は、質的因子探索型研究として、文章または内容の諸要素を相互関係を推し量りながら分析を進める Duverger³⁾の内容分析の技術に基づき、データの文脈から幾つかの局面を推論しつつカテゴリー化を進める Klaus Krippendorff⁴⁾の内容分析の手法を参考にしている。

2. 研究参加者

研究参加者は、「認知症の人と家族の会」(以下、家族の会) A 県支部に所属する認知症高齢者をかかえる家族介護者で、介護経験年数は問わないとした。

3. データ収集方法

3.1. 調査方法

調査は、「家族の会」A 県支部の事務局長に研究の主旨説明を行い、会の広報冊子の郵送の際に、調査用紙を同封する旨の同意を得た。

郵送した調査用紙の返信を以って調査協力の同意が得られたものとした。調査内容は、介護経験からくるさまざまな思いの中でも特に、将来自分が受けるであろう介護に関するものとし、無記名、自記式、自由記載による回答を求めた。

3.2. 倫理的配慮

調査用紙には、研究協力の自由性や匿名性、プライバシーの保護等に関する説明を記し、倫理面における配慮を十分に行った。

3.3. 調査期間

実施期間は平成18年12月から平成19年2月までであった。

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科 *2 元川崎医療短期大学 第二看護科
(連絡先) 松本啓子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-Mail: keimatsu@mw.kawasaki-m.ac.jp

4. データの分析方法

アンケート内容から内容分析の手法を参考にしながら類型化を進め、カテゴリー化を行った。

- (1) 調査用紙から、内容要素によってデータを抜き出し、二つ以上の意味を含まないようにデータを区切り、これを基本データとした。
- (2) 基本データの意味や表現が同じものを1つのまとまりとして、コード化した。
- (3) コードを、内容ごとに類型化し、サブカテゴリーとした。
- (4) サブカテゴリーの中心となる意味を反映させた抽象度の高い名称を付け、カテゴリーとした。

5. 信頼性・妥当性の保証

カテゴリー化のプロセスにおいて定期的に看護学及び質的研究の専門家によるスーパーバイズを受けた。

結 果

1. 対象者の属性

研究参加者は、男性20名、女性66名の合計86名であった。年齢は24歳から89歳で平均61.3歳(標準偏差±12.6)であった。

2. 家族介護者の思いに関するカテゴリー

家族介護者の介護に対する思いに着目しながら、内容分析した結果、基礎データ総数160コードより、16サブカテゴリー、10カテゴリーが抽出された(表1)。以下、カテゴリーは、大きさの順に【 】, [] で表示し、データは「 」で表示する。

2.1. 在宅で家族介護

【在宅で家族介護】に関しては、サブカテゴリーは、[在宅で家族による介護を受けたい]・[望んでいる家族介護は期待できない]で構成されていた。

「遠慮なく言えるのは結局、夫ですね。夫のできる範囲でいいです。」や「家族の中で見守ってもらいたい」のように、在宅でしかも家族による介護を望んでいると表現していた。また、「平均余命からすると、私が1人になりそうです。息子は持病があるので期待出来ません。私にとって優しい夫と息子に看護してもらいたいが、それは多分期待できません」と、希望としては、家族に介護をされたいが、事情がありそれはできそうにないという心情を吐露した表現もあった。

2.2. 充実した施設介護

【充実した施設介護】に関しては、サブカテゴリーは、[充実した施設介護を望む]・[施設での介護を覚悟している]で構成されていた。

「公の施設でもって、介護していただくのが一番」など、公の施設での介護を望んでいた。また、「施設で介護だと思うので、覚悟ができるよう努力するのみ」と、家庭事情を考慮した上で、施設の介護を念頭にそれに向けて努力をするとの表現をしていた。

2.3. 制度の充実

【制度の充実】に関しては、サブカテゴリーは、[サービスや制度の充実に希望する]で構成されていた。

「介護施設の人たちに希望しますが、まず、社会的信頼のおけるスタッフの養成をしていただくのはもとより信頼できる人であればどなたでも」、「国、

表1 家族介護者の介護への思い

カテゴリー	サブカテゴリー
在宅で家族介護	在宅で家族による介護を受けたい 望んでいる家族介護は期待できない
充実した施設介護	充実した施設介護を望む 施設での介護を覚悟している
制度の充実	サービスや制度の充実に希望する
身内にかけたくない介護負担	家族には介護の苦労は避けたい 生きている実感を感じたい
自分を理解した優しい介護	自分のペースを理解してもらいたい 心優しい介護を受けたい
他人任せ	お任せするしかない 誰からの介護でも良い
専門家による介護	専門職による介護を受けたい
地域による支援	自宅で地域の人の支援を受けたい
出来る限り自立	サービスを使ってでも自立 介護は受けたくない
予測できない	考えられない

地方行政は、いっそう温かい充実した介護サービス制度の確立を望みます」などと、介護施設の充実において、ソフトハードの両側面からのサービスや制度の充実を望んでいる表現をしていた。

2.4. 身内にかけたくない介護負担

【身内にかけたくない介護負担】に関しては、サブカテゴリーは、[家族には介護の苦労は避けたい]で構成されていた。

「真の希望は在宅ですが… ですが、自分の経験から、皆に介護の大変さをさせたくない思い…」等、在宅で介護を受けたいが、家族には介護の負担をかけたくないという思いが表現されていた。

2.5. 自分を理解した優しい介護

【自分を理解した優しい介護】に関しては、サブカテゴリーは、[生きている実感を感じたい]・[自分のペースを理解してもらいたい]・[心優しい介護を受けたい]で構成されていた。

「介護されていても、生きていることの意味が(意義)感じられる介護」等と、被介護の状況になっても生きていることを感じたいと表現していた。また、「現実となれば、自分らしく生活させてくれる人に見てもらいたい」や「家族であれ、他人であれ、自分を理解し優しく接してもらいたい」また、「私を大切に思ってくれることが伝わってくる人 そんな人に介護されたいと思う」等、自分を理解してもらえる状況で優しく介護を受けたいという思いが表現されていた。

2.6. 他人任せ

【他人任せ】に関しては、サブカテゴリーは、[お任せするしかない]・[誰からの介護でも良い]で構成されていた。

「してもらう人もないので、お任せするより外に他意はありません」と表現することで自己のおかれている環境を鑑みた上で、他者に委ねると表現していた。また、「誰からでもいい」や「人を大切に思ってくれる心優しい人達、誰でもよい」と、他者なら誰から介護を受けても良いという考えやその状況下においても自分を大事に思ってくれる優しい介護者なら誰でも良いと表現していた。

2.7. 専門家による介護

【専門家による介護】に関しては、サブカテゴリーは、[専門職による介護を受けたい]で構成されていた。

「プロの介護員に介護されたいと思います」や「できるだけ、元気で長生き… 最後はプロの方の介護」等と、専門知識や技術を兼ね備えた専門職に身を委ねたいという思いが表現されていた。

2.8. 地域による支援

【地域による支援】に関しては、サブカテゴリーは、[自宅で地域の人に支援を受けたい]で構成されていた。

「理想は住み慣れた地域で、知人や親族にされたいが、将来そんなことは無理な気がする」「地域の人々」等、介護を提供する対象者への希望の有無の中に自己の住み慣れた地域に限定する表現もされていた。

2.9. できる限り自立

【できる限り自立】に関しては、サブカテゴリーは、[サービスを使ってでも自立]・[介護は受けたくない]で構成されていた。

「家族に囲まれて自立できる部分は見守りで生活させて欲しい」や「… 自立をすることが、介護される人に求められているように思います」等、受ける側の考え方について、少しでもできることを残しつつ介護される側も自律を重んじるとする表現もあった。

2.10. 予測できない

【予測できない】に関しては、サブカテゴリーは、[考えられない]で構成されていた。

「未だ考えられない」「今の状態から考えていない(若いので)」等と、現状では考えることさえできないという表現もあった。

考 察

在宅認知症高齢者の家族介護者の介護に対する思いについて、将来自分が受けるであろう介護に対する思いに焦点を絞り分析した結果、介護に対する思いには、様々な思いが錯綜し揺れ動いている様子が明らかになったと考える。

土井ら⁵⁾は、Schulzら(1995)のレビューより、介護者の精神的健康状態への関連因子として、先ず介護者側の要因は、発症前の介護者と被介護者との人間関係や自尊心、アイデンティティをあげ、そして、被介護者側の要因は、問題行動のみであったと報告している。本研究においては、介護者と被介護者の関係性までは分析できなかった。しかし、介護を受けるという状況になる以前の人間関係によっては、この家族だから介護されたいという思いや、またその逆に、家族だから介護の大変さを味合わせたくないという発想も多いと考えられる。

今回の結果から、在宅での介護と施設での充実した介護を望む二つの思いが覗いていた。また、介護を受ける場合、身内に負担はかけたくないが、自分を理解してくれる優しい介護を望んでいる部分もはっきり示されていた。しかし、現実には将来自分が

受けるかもしれない介護のことであり、そのときになってみなければ分からないし、状況によっては他人任せで良いとも考えている。しかしそこへ向かっていく過程においてできる限り自己の自立を保ちながら生涯を全うしたいという思いが表現されている。「上手く老いる」として Successful Aging の視点から老化過程を鑑みると、健康⁶⁾ や自己保存⁷⁾ に通ずると考えられた。

看護職者は家族の話し合いなどに入りつつ、体験や思いを共感しつつ、情報を分け合うことに尽力することが望まれる。なお、意思決定過程には、情報に関する感情、意思決定を含んだ感情、サポート介護者の存在に対する感情、自己のニーズに的確に対応してもらえという感情等が複雑に関与しているが、インフォーマルケアの大半の研究では、いろいろな介護事情に関して満足していないという回答が多いとされている。他方、病院や施設のシステムを

良く知り、スタッフとのよりよい関係を持ち、理解したうえで専門的なヘルスケアの視点で関わることによって、介護の諸事情を変革する可能性を秘めている⁷⁾。今回の報告においても、頼れる存在として、専門家や充実した施設介護が含まれているところより、より良い関係性の元にある安心感ということにおいては、支持する内容が得られたと考えられる。

将来自分が受けるかもしれない介護への思いを検討することは、そのときになってみなければ分からないのが本音かもしれない。しかし、そこへ向かっていくと仮定した上で真摯に自己の介護観を養い、そこへ行き着くまでに、ハードとソフト両側面からも対処すべきことを明確にしておく必要性は高く、それを個々のそれぞれが自覚するよう促していく必要を感じる。今後さらに症例を増やし、考察を深めていくことが今後の課題と考える。

文 献

- 1) 松本啓子, 高井研一: 認知症高齢者の特性と家族介護者のニーズの関係。第25回日本看護科学学会学術集会講演集, 330, 2005。
- 2) Zarit SH, Reever KE and Bach-Peterson J: Relative of the Impaired elderly: correlates of Feelings of burden. *The Gerontologist*, 20(6), 649-655. 1980。
- 3) Duverger M, 著深瀬忠一, 樋口陽一 訳: 社会科学の諸方法, 第2版, 145-169, 勁草書房, 東京, 1968。
- 4) Krippendorff K, 三上俊治, 椎野信雄, 他 訳: メッセージ分析の技法「内容分析」への招待, 第1版, 勁草書房, 東京, 2001。
- 5) 土井由利子, 尾方克巳: 痴呆症状を有する在宅高齢者を介護する主介護者の精神的健康に関する研究。日本公衆衛生雑誌, 47(1), 32-46, 2000。
- 6) 嵯峨座晴夫: エイジングの人間科学。学文社, 東京, 1993。
- 7) 松本啓子, 渡辺文子: 後期高齢者の Successful Aging の意味—郡部に居住する高齢者の聞き取り調査から—。日本看護研究学会雑誌, 27(5), 25-30, 2004。

(平成20年6月10日受理)

**On Family Members' Caring for Demented Elderly Patients at Home
— with Reference to their Expectation of Future Care —**

Keiko MATSUMOTO and Reiko SEITA

(Accepted Jun. 10, 2008)

Key words : family members, demented elderly patients, caregiver

Correspondence to : Keiko MATSUMOTO Department of Nursing , faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: keimatsu@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.18, No.1, 2008 239-243)